「未来にほほえみかける」(2021.10.17)

彼女は亜麻布を織って売り、帯を商人に渡す。
力と気品をまとい、未来にほほえみかける。(箴言 31:24-25)

私たちは5週にわたって箴言を読みましたが、随所にウ～ンと感じ入る知恵の言葉があったかと思います。特に最後の 31 章には信仰姿勢を正すみ言葉が用意されていました。上掲の「未来にほほえみかける」です。この個所の小見出しには「有能な妻」とありますが、この「有能な妻」の「有能さ」とは何でしょう。31:30 節には「あでやかさは欺き、美しさは空しい。主を畏れる女こそ、たたえられる。」とあります。つまり、「主を畏れる」ことです。実は、これは箴言のテーマである「知恵の初め」の言葉です(箴言 1:7)。従って、「有能な妻」とは「知恵」を擬人化したものではないかと思われます。

では、「未来にほほえみかける」とはどういうことでしょう。将来のことをワクワクして待ち望むことです。たとえ現在の状況が八方ふさがりでも、そのふさぐ壁を遥かに超えて偉大なる力の主を見上げ、期待して主に望みを置くことです。それが「未来にほほえみかける」ことであり、「主を畏れる」ことにつながります。

今私がほほえみかけている未来は、「主と同じ姿に造りかえられる」ことです(Ⅱコリント 3:18)。これは、主と結ばれた者に働く聖霊の業です。復活の主と同じように、永遠の命を戴き、もはや死もなく悲しみも嘆きも労苦もない神の子に造りかえられる。そしてあの十字架上の主と同じように、心から赦し、心から愛し、心から仕える者に造りかえられる。さらに言うならば、病む者に涙し癒されたイエス様のように、ダイナミックに働く聖霊の場に造りかえられるのです。牧師なのに改めてキリスト教って凄いなと驚かされます。教団の信仰告白も、この変わらざる恵みのうちに、聖霊は我らを潔めて義の実を結ばしめ、その御業を成就したまふ、とその希望を謳っています。

10 月 10 日、第 1 回教会懇談会が開かれ、その席上最後に「10 年後、この教会はどうなるのだろう。」との声があり、一人ひとりが課題として重く受け止めました。この日は「神学校日」でもあり、厳しい環境にある神学校の為に祈りを合わせましたが、各教会も同様です。教団は「2030 年問題」という表現で、2020 年現在、1685 ある教会・伝道所の 10 年後の将来を危惧しています。しかし、私たちは今できることを愚直にしたい。それは与えられている恵みの約束をしっかり握り、未来に微笑みかけて生きることです。